

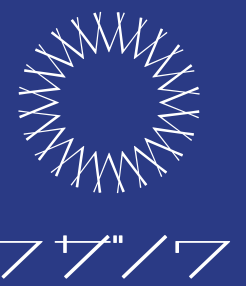
PETALES DE GIVRE by Sylvain Le Guen  
©NATHALIE BAETENS



Maîtres d'Art Aritan

# 有田と フランス人間国宝

ワザノワ会議 - 有田



[www.wazanowa.com](http://www.wazanowa.com)

世界最高峰のワザの共演をします。  
有田焼とフランスの人間国宝が、  
ワザと伝統を四〇〇年紡いできた

日本磁器発祥の地である有田町は2年前に創業400年を迎えました。17世紀初頭、朝鮮半島から渡ってきた陶工・初代金ヶ江三兵衛(通称:李参平)らによって、有田町の泉山で磁器の原料となる陶石が発見されました。明治期に入りパリでの万国博覧会を契機に、その華やかで精緻なつくりの焼き物は、特にヨーロッパの王侯貴族に愛され、ジャポニズムブームを巻き起こし、大きな影響を与えるにいたりました。

近年有田は、他地域の伝統産業同様に、日本人の洋食文化の浸透や器離れなどから、産業自体は縮小傾向にあると共に、その一端を担い、伝統的な技術や文化の継承をしてきた技術者や陶芸家の市場も縮小し、後継者の問題を含め課題を抱えております。この伝統技術を維持継承するにあたり、日本では1955年に重要無形文化財団体及び各個(人間国宝)の認定が行われ、その39年後の1994年、フランスでも伝統文化保持者フランス人間国宝/Maitres d'art(メートル・ダール)の認定がスタートしました。そして昨年、このフランス人間国宝の展覧会が、東京国立博物館で開催されました。

日本とフランスは共に伝統文化の遺産を尊ぶ国であり、特に伝統工芸の分野では世界を魅了する技術(ワザ)を有しています。遡ること160年前に日仏は友好を結び、その後のパリ万博で、日本がフランスに及ぼしたのはデザインや技術(ワザ)の影響のみならず、伝統文化の伝承に至る制度まで、フランスが日本に倣っていたことには驚かされました。

今回、フランス人間国宝の作家と作品とのご縁をいただきました。これを機に、私たちのホームベースである"有田"にフランスを招き、お互いが追求する創作の技術(ワザ)の極みを、語り合い、認め合い、高め合う機会をつくり、さらに有田焼と共に育まれた有田町の伝統建築や窯業関係者を中心に学生などとも協力し、町全体を活用しての「ワザノワ会議-有田」を実施します。そしてこの会議は、国境を越えた最高峰の技術(ワザ)が化学反応を起こす機会として継続させたいと考えております。

本年は日仏友好160周年の記念の年にも当たります。フランス人間国宝による作品と有田の技がコラボレーションするこの機会を、ぜひご堪能ください。

ワザノワ会議準備室  
代表 金子昌司

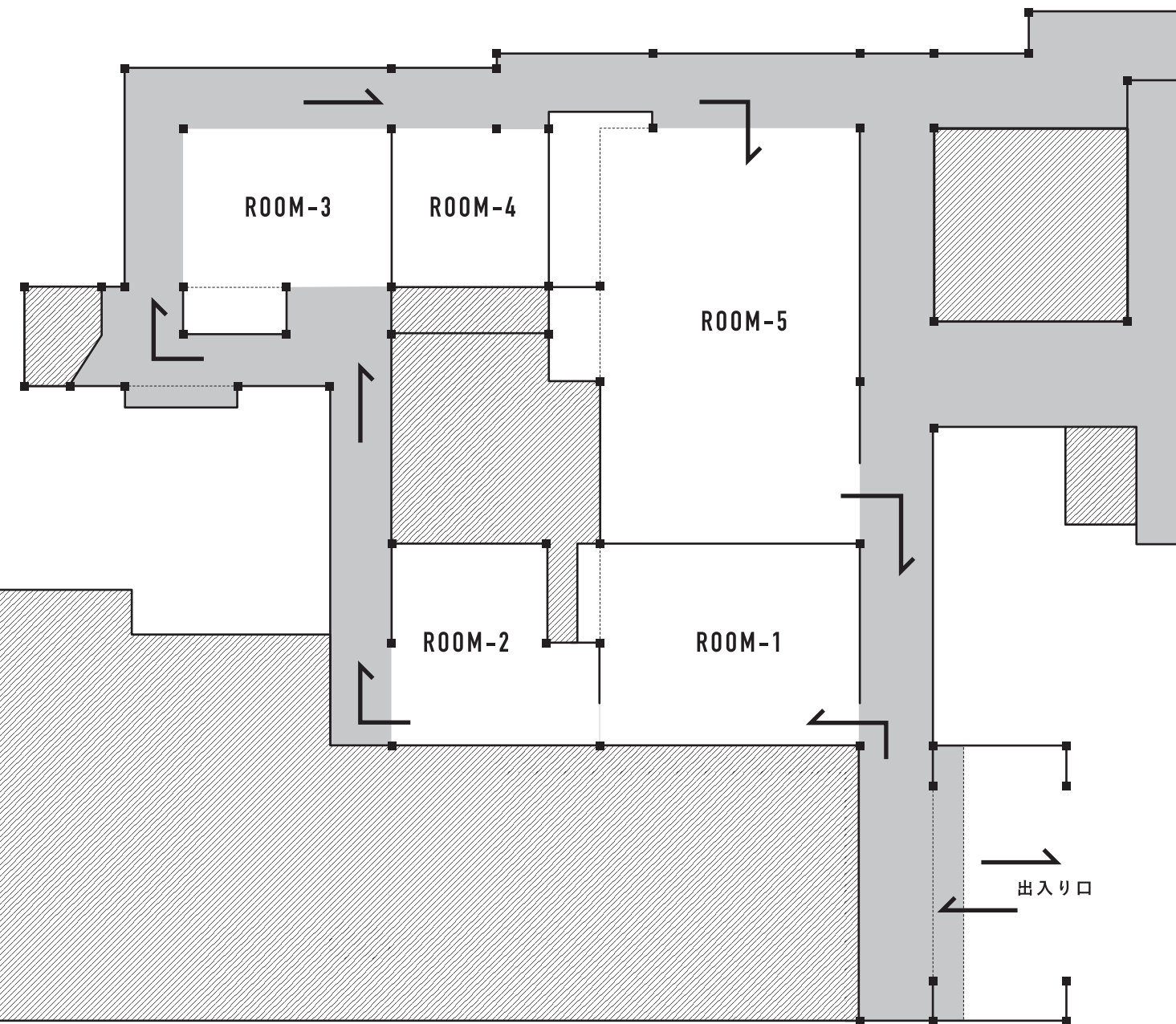


## ワザノワ会議とは・・・

世界中の工芸は、それぞれの環境で生まれ、悩み、発展し、破壊され、継承されてきました。その中心にある共通項が「手仕事」「手わざ」。人の手による技術は、自然環境、土地、生活、時代背景など、さまざまな条件を巻き込んで環(わ)を成し、新たな出会いから生まれる化学変化によって、次なる環を生み出します。

ワザノワ会議は、世界に数多ある「わざの環」を再発見し、互いに認め合い競い合うことで、更なる高みを目指し、継承されていくことを目指します。

## 会場見取り図



### ROOM-1 / INSPIRING

ナタナエル・ル・ベール (真鍮細工)  
セルジュ・アモルソ (革細工)  
ロラン・ノグ (エンボス加工)  
エルベ・オブリジ (石材彫刻)  
十四代中里太郎右衛門

### ROOM-2 / MAÎTRES D'ART

シルヴァン・ル・グエン (扇)  
井上萬二

### ROOM-3 / TRANSMITTING

ロラン・ダラスプ (金銀細工)  
十四代今泉今右衛門  
十五代酒井田柿右衛門

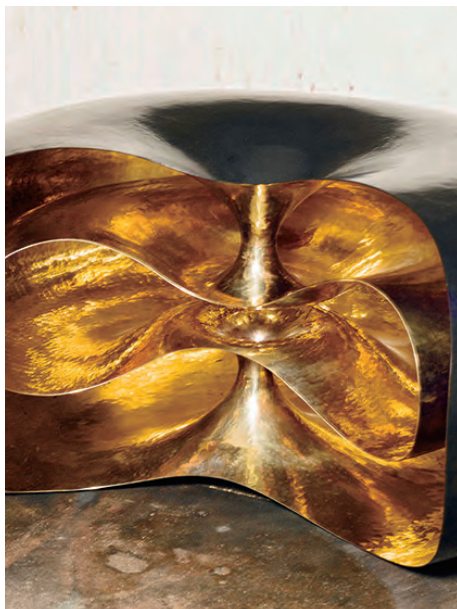
### ROOM-4 / CONTEMPLATING

ジャン・ジレル (陶器)

### ROOM-5 / INNOVATING

フランソワ＝グザヴィエ・リシャール (壁紙)  
ミシェル・ウルトー (傘)  
矢野直人  
百田暁生  
庄村久喜  
中村清吾  
畑石修嗣





©Philippe Chancel

真鍮細工

ナタナエル・ル・ベール

Nathanaël LE BERRE

オリヴィエ・ド・セール国立高等工芸美術学校(ENSAAMA)でステンドグラスと真鍮の技術を学び、その後Hervé Wahlenで真鍮の技術に磨きをかけた。2004年以降30以上の作品を制作しており、彼の作品はパリのla galerie Patrick Fourtinに展示されている。代表作は《L'infinie》。

真鍮における、メートル・ダールの第一候補。



©Philippe Chancel

エンボス加工

ロラン・ノグ

Laurent Nogues

オリヴィエ・ド・セール国立高等工芸美術学校を卒業した後ポスターやロゴ制作に携わるが、1994年、父と同じゴフラージュ(エンボス加工)の道に入り、会社を設立。1998年からはより現代的な創作に取り組んでいる。世界中の最高級ブランドとコラボしており、CHANELの高級クラスのパッケージ・カード類は、30年来、彼が作成を担当している。



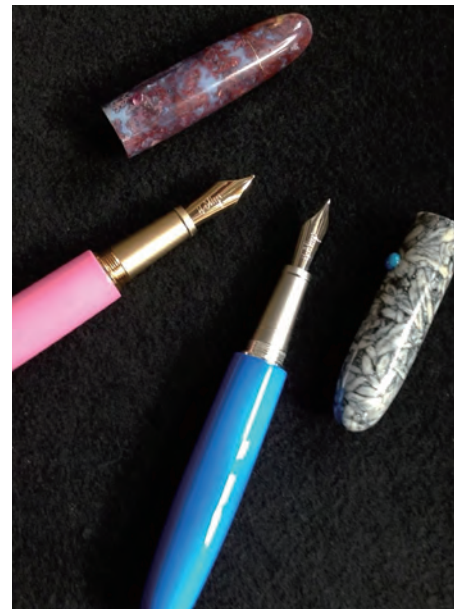
©Philippe Chancel

革細工

セルジュ・アモルソ

Serge Amoruso

ケリーバッグの産みの親で、フランスを代表する革バッグ作家。エルメスの工房で培った確かな技術と、大胆な色使い、独創的なデザインで世界中のセレブを虜にしている。特に、ガルーシャやクロコダイル等のエキゾチックなレザーの使い手として有名。自然の風景に着想を得て作られる彼の作品は、華やかさと手縫いならではの温かみを備えている。



©JulienCrespe

石材彫刻

エルベ・オブリジ

Herve Obligi

16世紀フィレンツェの宝石彫刻技術(きりばめ細工)を継承し、オブジェやテーブル、大理石張りの床などを手掛ける。カルティエ、ファベルジェにて、芸術遺産の石彫作品の修復も担当。16世紀の技術を完璧に修得し、非の打ち所のない技術と繊細な美的センスを持つ。きりばめ細工の技術を宝石細工に適用し、創造性に富んだ作品を製作している。





唐津焼  
十四代中里太郎右衛門

Taroemon Nakazato

唐津焼の名門・中里家の14代当主。長く途絶えていた古唐津の伝統を復興させた12代、芸術性を高めた13代の後を継ぎ、伝統を中心に据えつつ、新しい唐津焼を切り開いている。素地に色の異なる化粧土を塗り、表面を削って文様を出す「掻き落とし」の技法を追求する中で、鮮烈な青色「セルリアンブルー」にも挑戦。まちづくりにも積極的な、唐津の牽引者。



©Philippe Chancel

扇  
シルヴァン・ル・グエン

Sylvain Le Guen

映画界での指名率1位、世界で最も注目される若手扇子職人。2015年に、若干38歳という最年少でフランス人間国宝に認定された。18世紀の書「百科全書」から学び、現代的な作品の創作に生かしている。また、日本の折り紙に着想を得て、代表作となるポップアップ扇子を生み出した。その発想と、蝶が羽を広げるような優美さで、愛好家を虜にしている。



## フランス人間国宝 Maitres d'Art/Living National treasure

フランス文化通信省により、伝統工芸の最高技能者に授与される称号。1994年、日本の重要無形文化財認定（通称“人間国宝”）に倣い作られ、ユネスコにも登録。伝統的且つ希少な技能の第一人者であり、熟練した技と革新的開発の能力、また教育的な力量を有し、伝承、発展、革新等の使命を遂行できる者だけに授与される。技能は19分野217職種に分類されている。2018年現在、認定者は134名。彼らの主な顧客は、世界の王族、貴族、財閥、国立美術館・博物館、老舗ブランドなどである。

フランスでは、その他の工芸の賞として、Meilleur Ouvrier de France (MOF)、Entreprise du Patrimoine Vivantなどがあるが、このフランスメートル・ダール（国家最優秀職人/Maitres d'Art）が、フランスで最も権威ある称号とされている。



有田焼  
井上萬二

Manji Inoue

伝統的なろくろ成形の技術を極めた重要無形文化財「白磁」保持者。復員後、初代奥川忠右衛門に師事。そこから白磁の真髄を追い求めてきた。その後柿右衛門窯や佐賀県立窯業試験場に勤務しながら成形、釉薬の研究を重ね、独立後も、その卓越した技術で、シンプルであるがゆえに難しい白磁の世界の造形美を追求し続けている。





## ROOM-3



©Philippe Chancel

### 金銀細工 ロラン・ダラスプ

Roland Daraspe

フランス国立博物館所蔵のアンティーク銀細工の修復は殆どは彼の手には掛かっている。また、エリゼ宮の外交贈答用注文も多く、ミッテラン大統領からエリザベス女王に送られたワイン試飲グラスを特注されている。作品は、ルーヴル美術館などで何度も展示され、現在はフランス各地の装飾芸術博物館などでも見ることができる。



### 有田焼 十五代酒井田柿右衛門

Kakiemon Sakaida

江戸初期に創業した色絵磁器の名門・柿右衛門窯の15代当主を2014年に襲名。17世紀後半にヨーロッパを席卷した柿右衛門様式の様意識と赤絵の映える「濁し手」の技術を受け継いでいる。団栗などの新しいモチーフや、あえて代名詞である赤を使わない作品に取り組むなど、チャレンジを繰り返しながら、時代に即した柿右衛門の作風を創造している。



## ROOM-4



### 有田焼 十四代今泉今右衛門

Imaemon Imaizumi

江戸期は佐賀藩の御用赤絵師として、それ以降も鍋島の格調を守り代々最高の色絵磁器を作ってきた今泉家の14代を2002年に襲名。色鍋島伝統の白抜き技法「墨はじき」や13代が確立した「薄墨」「吹墨」に加え、「雪花墨はじき」「プラチナ彩」という新しい技法で現代の色鍋島を追及している。2014年に重要無形文化財「色絵磁器」保持者に認定。



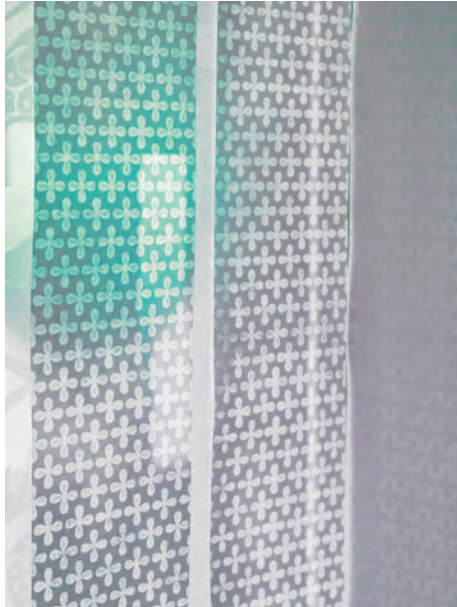
©Philippe Chancel

### 陶器 ジャン・ジレル

Jean Girel

宋の時代の陶芸技術を全て習得し、40年に渡り「曜変天目茶碗」の再現研究を続けている。曜変天目の製法をほぼ解明し、「油滴天目」のシリーズ制作に取り組んだ。その集大成として、2017年の東京で開催された「フランス人間国宝展」では、101の茶碗を展示。北京と台湾の故宮博物館、並びに大阪東洋陶磁美術館が彼の天目茶碗を所蔵している。





©Philippe Chancel

壁紙

フランソワ＝グザヴィエ・リシャル

François-Xavier Richard

フランス壁紙のアンティークから現代まで、画家、彫刻家、版画家でもある彼は、アンジェの美術学校在学時から劇場の空間デザイン等に携わっていたが、その後壁紙に興味を持ち、造形芸術家としての才能を生かして壁紙職人の道に進む。1999年には自身のアトリエ、ATELIER D'OFFARDを開き、オーダーメイド壁紙の制作や、アンティーク壁紙の修復も手がけている。



唐津焼

矢野 直人

Naoto Yano

名護屋城跡の港を見下ろす場所に窯を構える。古唐津に対する憧れが強く、残された陶片を手がかりに研究を重ねている。唐津の砂岩を採取して、土や釉薬を自作し、薪を使って登り窯で焼成。黒唐津の評価が高いが、朝鮮唐津、斑唐津、絵唐津、粉引きや李朝まで、400年前の先人が行っていたあらゆる作風で現在の人にも使いやすい器を作っている。



©Philippe Chancel

傘

ミシェル・ウルトー

Michel Heurtault

フランスオートクチュール界、映画界、そして世界の王族から指名を受ける傘デザイナー。既成の工業製品とは対照的な、タフタ、オーガンジー、シルク、リネン、コットン、銘木を使用した本物の高級傘を提供し続けている。修復は勿論のこと、数々のオートクチュールを数多く手掛け、フランス淑女を始め世界中のセレブの為の高級傘をみつらえている。



有田焼

百田 暁生

Akio Momota

独特のセンスと卓越したろくろ技術から生み出される美しいフォルムの白磁、青白磁。そこに、辰砂、瑠璃釉などの釉薬を巧みに操り、色気漂う作品に仕上げる。全ての作品が、空の青や工房周辺の植物など、自然をイメージして生み出されている。

2015年に、工房兼ギャラリーをオープンした、今後の有田を背負って立つ作家の1人。







有田焼  
庄村 久喜  
Hisaki Shomura

白磁の造形美で魅せる作家。微妙な釉薬の厚みや細かい彫りで器に当たる光をコントロールする、非常に繊細な作風。「白」の世界を独自に追求し、繊細な白磁に絹のような光沢感を含ませた「白妙磁(しろたえじ)」を開発。



伊万里鍋島焼  
畑石 修嗣  
Shuji Hataishi

創業80年以上の歴史を持つ畑萬陶苑の5代目候補。家業である窯元での仕事に取り組みつつ、個人作家としても活動している。シャープな造形の口縁部にギザギザを彫り込み、マットな黒の釉薬を用いる「Rin」シリーズには、大学で石彫を専攻していた経験が生かされている。この「Rin」シリーズは「メゾン・エ・オブジェ」でも人気を博した。



有田焼  
中村 清吾  
Seigo Nakamura

ろくろの名手と謳われた故・中村清六氏の孫。清六氏の薫陶を受けたろくろ技術に独自のセンスを加え、白磁の造形美を追求する。数種類の透明の釉薬を巧みに操り、中でもぬめっとした質感が特徴のマット釉は多くのファン的心をつかんでいる。JR九州の「ななつ星」の車内で使用されている食器も制作。近年は青磁にも取り組む、有田の次世代を担う若手。



## 展示デザイン



建築家/空間デザイナー

### リナ・ゴットメ Lina GHOTMEH

レバノン生まれ。現在パリを拠点に活躍。世界をリードする国際建築家として頭角を現しつつ、DGT設計事務所の共同設立者として、エストニア国立博物館を完成させた。2010年、European Architects Review誌で、「これからの十年間で先見性あふれる仕事をする建築家10人」に選出されるなど、世界的に注目される建築家の一人。



©Hannah Assouline



### 谷津 健治 Kenji YATSU

【職歴】

磯崎新アトリエ  
ヤツシャハルアーキテツク・設立ー現在



### 砂原 カリム Karim CHAHAL

【職歴】

ウェイスマンフレディ ニューヨーク  
隈研吾建築都市設計事務所  
磯崎新アトリエ  
ヤツシャハルアーキテツク・設立ー現在



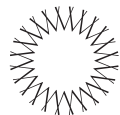
# 有田町広域マップ



# 有田とフランス人間国宝

## ワザノワ会議 - 有田

会期	11月18日[日]~25日[日]
会場	桂雲寺(佐賀県西松浦郡有田町幸平2-3-1)
主催	ワザノワ会議準備室
後援	在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、佐賀県、有田町、 (公財)金子財団、(一社)九州観光推進機構、 「肥前窯業圏」活性化推進協議会、(一財)生涯学習開発財団
協力	文化庁地域文化創生本部、アリタポーセリンラボ(株)、宗政酒造(株)
特別協賛	井上萬二窯、今右衛門窯、柿右衛門窯
協賛	(株)キハラ、(株)源右衛門窯、(株)香蘭社、佐賀県陶磁器工業(協)、 (株)ジェーシーコムサ、深川製磁(株)、(株)福岡ハイヤーサービス、 (株)まるぶん、 佐賀県外・県内企業、有田町内企業各社 <small>(50音順)</small>
メディア協力	ACT4、JR九州、美術手帖
会場協力	桂雲寺
展示デザイン	Lina Ghotmeh/Lina Ghotmeh-Architecture
制作	ヤツシャハルアーキテクツ
実施協力	有田焼未来プロジェクト、有田商工会議所、(一社)有田観光協会
作品協力	HEART & crafts
企画協力	HEART & crafts JAPAN INC.、(株)有田まちづくり公社
お問合せ	(一社)有田観光協会 TEL 0955-43-2121 HPありたさんぽ <a href="https://www.arita.jp/">https://www.arita.jp/</a>
公式サイト	<a href="http://www.wazanowa.com">www.wazanowa.com</a>



ワザノワ